

# 『敦煌新本 六祖壇經』試訳(二)

佐藤 悅成

善知識よ、すべて須らく自体に無相戒を授すべし。<sup>(一)</sup>一時に慧能に逐つて口に道え、善知識をして自らの三身仏を見せしめん。「自ら色身に於て清淨法身仏に帰依す。自ら色身に於て千百億化身仏に帰依す。自ら色身に於て当身円満報身仏に帰依す」<sup>(已上四唱)</sup>色身は是れ舍宅なり、帰すと言ふべからず。向者の三身は自ら法性に在り、世人に尽く有れども、迷いて見えざるが為に、外に三身の如来と覗めて、自らの色身中に三身仏を見ず。善知識よ、善知識に説くことを聽け。善知識をして自らの色身に於て、自らの法性に三身仏有ることを見せしめん。此の三身仏は、自性によりその上に生ず。何をか清淨〔法〕身仏と名づく。善知識よ、世人の性は本より自淨にして、万法は自性に在り。一切の

悪事を思惟せば、即ち惡行を行じ、一切の善事を思量せば、便ち善行を修む。是の如く一切法は尽く自性に在りと知るべし。自性は常に清淨なり、日月は常に明なるも、ただ雲に覆蓋されるが為に、上は明るく下は暗く、日月星辰を了見することあたわず。忽ち惠風の吹くに遇わば、雲霧尽く散卷し、萬像森羅、一時に皆現る。世人の性は淨にして、なお清天の如し。慧は日の如く、智は月の如し。智慧は常に明なるも、外に於て境に著すれば、妄念の浮雲に蓋覆され、自性の明らかなることあたわず。故に善知識に遇い、真正の法を開かば、迷妄を吹却し、内外明徹し、自性の中に於て万法は皆な現る。一切法は自性に在り、名づけて清淨法身と為す。自ら帰依する者は、不善の心及び不善の行

を除く、是れを帰依と名づく。何をか名づけて千百億化身仏となす。不思量の性は即ち空寂にして、思量は、即ち是れ自ら化となる。悪法を思量すれば化して地獄と為り、善化を思量すれば化して天堂と為る。毒害は化して畜生と為り、慈悲は化して菩薩と為り、智慧は化して上界と為り、愚痴は化して下方と為る。自性の変化は甚だ多く、迷人は自ら知見せず。一念が善ならば、智慧即ち生ず。一燈はよく千年の闇を除き、一智はよく万年の愚を滅す。向前を思う莫れ、常に後を思え。常に後の念が善なれば、名づけて報身と為す。一念が惡ならば、千年の善の<sup>(三)</sup>亡を報却す。一念が善ならば、千年の惡の滅を報却す。無常の已に來りて、後の念が善なれば、名づけて報身を為す。法身に従つて思量すれば、即ち化身なり、念々が善なれば、即ちこれ報身なり。自ら悟り自ら修するを、即ち帰依と名づくなり。皮肉は是れ色身にして、色身は是れ舍宅<sup>(三)</sup>なれば、帰依と言わざるなり<sup>(四)</sup>。但だ三身を悟れば、即ち大意を識る。

修行者諸君、諸君は自ら自身に無相戒を授けなければならぬ。衲について一度に唱えよ。諸君が自らの三身仏と

出会えるように導こう。「この肉身において、清浄なる法身の仏に帰依いたします。この肉身において千百億という無数の姿に変化する仏に帰依いたします。この肉身において、まさに完成した報身の仏に帰依いたします」以上の句を三度唱える。肉身は家屋であつて、それに帰依するといつてはいけない。さきほどの三身は自らの本性のうちにあるのだ。世間の人々のすべてにそれは具わつてゐるが、眞実を見失つていいるために、自己の本性のうちにあるものに気づかないで、外に向かつて三身の仏を求め、自己の内に三身の仏がいることに気がつかないのである。諸君、衲の話をよく聞きなさい。諸君に自分の中に自己そのものとしての三身仏があることに気づかせてあげよう。この三身仏は、諸君の本性から出てくるものだ。では、何を称して清浄な「法」身仏といふのであるか。諸君、世間の人々の本性はもともと清浄であつて、すべての存在はこの自身の本性にある。あらゆる悪事を思うならば、即座に悪い行為が出てくるし、あらゆる善事を思うならば、即座に善い行為が出てくる。このように、一切の存在は自己の本性の中にあると知らねばならない。自己の本性は常に清浄なもので、例えば太陽

や月がいつも明るく、すべてを照らしているようなものである。ただ雲に覆われると雲の上は明るく、その下の方は暗くなり、太陽や月や星などを地上から見ることができない。もし恵みの風が雲や霧を吹き払つたら、すべての事象がみなはつきりと姿を現すようなものである。世間の人の本性がいつも清淨なことは、あたかも澄みわたつた空のようなものである。慧は太陽のような存在であり、智は月のような存在である。智慧はいつも内に輝いているが、外部の事象にとらわれると、煩惱という浮雲にかくされて、自己の本性を明らかにすることができなくなる。それ故、良き指導者のもとで正しい教えを受け、その迷いを払い去るならば、内も外もこれ以上ないほどにはつきりし、自己の本性の中に対する存在が姿を現すであろう。一切の存在は自己の本性にあり、これを称して清淨法身というのである。自ら帰依するならば、善くない心、及び善くない行為は除かれるであろう。これを称して帰依というのである。何を称して千百億の無数の姿に変化する仏というのである。対象に思いを向けなければ、本性はもとより虚空と同じで、こだわりのないものだが、心が動いて対象を捉え

ると、そこに自ら変化が生じるのだ。悪事に思いが向ければ、自性は変じて地獄となり、善事に思いが向けば、自性は変じて天上界となる。本性をそこなう思いは、自性を変えて畜生となし、慈悲の心は、自性を変えて菩薩となす。智慧は自性を変えて天上界となし、おろかさは自性を変えて地獄界となす。自己の本性の変化はこのようにはなはだ多方面である。迷う人はこれらのこと自覚することができないのである。一念が善であれば、智慧がそこに生じる。一つの燈火が千年も続いてきた闇を一瞬にして明るくするよう、ひとたび悟りの智慧が生ずれば、過去一萬年の暗愚も消すことができる。過去のことを考えるべきではない。いつも未来のことを思うべきである。未来への想いが善であれば、これを称して報身という。一瞬の心の動きが悪であれば、一千年の善行を無くすという報となる。一瞬の心の動きが善であれば、千年の惡を滅ぼす報となる。たとえ死して後も未来の念が善であるならば、これを称して報身といふ。法身に従つて思慮してゆけば、即ち化身となる。一瞬一瞬の心の動きが善であれば、即ち報身である。自ら悟り自ら修行すれば、これを称して帰依というのである。

皮膚や肉は身体であり、肉体は家屋であるから、肉体に帰依するとはいわない。もし自己の本性に具わっている三身に気づくなら、即座に悟りを得ることになるのだ。

校記

- 〔一〕 原本は「體」を「聽」に作る。敦煌本により改める。  
「授」を「受」に作る。
- 〔二〕 原本は「佛」の字が欠ける。敦煌本により加える。
- 〔三〕 「於」の字を敦煌本により加える。
- 〔四〕 敦煌本により、この四文字を小文字に訂正する。
- 〔五〕〔六〕〔七〕 原本は「三身」を皆「三世」に作る。前後の文脈からすれば、これは「三身」の誤りである。
- 〔八〕 原本は「萬法自性在」に作る。敦煌本により改める。
- 〔九〕 原本は「自性」が欠ける。敦煌本により加える。
- 〔一〇〕 「森」を原本では「參」に作る。
- 〔一一〕 原本は「著境」を「看境」に作る。惠昕本により改める。
- 〔一二〕 「善士」は原本に「善心」に作る。前後の文意に合わないため、鈴木氏の校訂本を参考にして改める。惠昕本は「自性起一念惡、滅萬劫善因」に作る。
- 〔一三〕 原本は「皮肉是色身舍宅」に作る。惠昕本により校訂する。
- 〔一四〕 原本は「不在歸也」に作る。惠昕本を参考にして改める。

今既に自らの三身仏に帰依し已る。善知識のために四弘の大願を發せしめん。善知識は一時に慧能に逐つて道え。

衆生は無辺なり、誓つて度せんと願う。

煩惱は無辺なり、誓つて断ぜんと願う。

法門は無辺なり、誓つて学ばんと願う。

無上の仏道を、誓つて成せんと願う。三唱

善知識よ、衆生は無辺なり、誓つて度せんと願うも、慧能が度するにあらず。善知識よ、心中の衆生を、おののおの自身の自性により自ら度すべし。何をか自性の自ら度すと名づくるや。自らの色身の中の邪見・煩惱・愚痴・迷惑は自からに本覺性有り。ただ本覺性はまさに正見により度すなり。既に正見・般若の智を悟らば、愚痴・迷惑を除却し、衆生は各自自ら度するなり。邪の來たらば正をもつて度し、迷の來たらば悟をもつて度し、愚の來たらば智をもつて度し、惡の來たらば善をもつて度し、煩惱の來たらば菩提をもつて度す。是の如く度すを、是れ名づけて真の度となす。煩惱は無辺なり、誓つて断ぜんと願うとは、自心の虚妄を除くなり。法門は無辺なり、誓つて学ばんと願うとは、無上の正法を学ぶなり。無上の仏道を誓つて成せんと願うと

は、常に心行を下し、一切を恭敬し、迷執を遠離し、智を覺りて般若を生じ、迷惑を除却して、即ち自ら仏道の成するを悟り、誓願を行ずる力となるなり。

今ここに自らの内なる三身仏に帰依したのであるから、次いで諸君が「四つの限りなき大きな願い」を起こすよう導こう。諸君は同時に慧能に従つて唱えなさい。

迷う人々は限りなく多いが、すべての人をかならず救うことを決心する。

我々の内なる煩惱は果てしもないが、誓つてそれを断ち切ることを決心する。

釈尊の教えに終りはないが、誓つてそれを学び尽くすことを決心する。

この上なく尊い仏道を誓つて成就することを決心する。

修行者諸君、迷う人々は限りなく多いが、必ず救うことを決心すると、このようにいふのは、この衲が諸君の心中の迷いを救うのではない。諸君、心中の迷いはそれぞれ自身の手で救わねばならない。では何を称して自己の真性によつて自らを救うというのであろうか。それは、

自身の中に生じる不正な考え方や、苦惱や、愚かさや、迷いというものには、もとより本覚性がある。この本覚性を正しいものの見方によりめざめさせるのである。すでに正しい見方や根源的智慧を得たならば、愚かさ・迷いをそれによつて除くことができ、迷う人々は自分で自身を救うのである。心によこしまな想いが生じたなら正で救い、迷いが生じたなら悟りで救い、愚かさが生じたなら智慧で救い、悪が生じたなら善で救い、煩惱が生じたなら菩提で救う。このようにして救うことをまことの救いといふのである。心の迷いは果てしもないが、誓つて断ち切ろうと決意することは、自分で自身の心の嘘いつわりを除き去ることである。真理の教えに終りはないが、必ず学び尽くそうと決意することは、この上もなく正しい教えを学ぶことである。この上もなく尊い仏陀の悟りを、自ら成就することを、心に固く誓うとは、常に正直に謙虚に行動し、すべての迷いから遠く離れ、自身を識つて清浄な智慧をおこし、迷いを除き去つて、仏陀の悟りを完成させようとするのである。このようにして修行することができるものは、自ら發した誓願の力によるのである。

校記

〔二〕 原本は「度」の字が欠ける。敦煌本により加える。

〔二〕 原本は「邪來正度」の四字が欠ける。敦煌本により加え  
る。

〔二〕  
既に四弘誓願を發す。善知識のため無相懺悔を説き、  
三世の罪障を滅す。

大師の言く、善知識よ、前念・後念及び今念は、念々に愚迷に染まずして、従前の惡行<sup>(四)</sup>を一時に自性より若し除かば、即ち是れ懺悔なり。前念・後念及び今念は、念々に愚癡に染まずして、従前の矯詐<sup>(五)</sup>を除却し、雜心を永断するゆえ、名づけて自性の懺と為す。前念・後念及び今念は、念々に疽疫に染まずして、従前の嫉妬心<sup>(七)</sup>を除却す。自性若し除かば、即ち是れ懺なり。<sup>(已上三唱)</sup>善知識よ、何をか懺悔と名づく。懺とは、終身作ざるなり。悔とは前非惡業を知り、恒に心を誰れざるなり。諸仏の前に無益を口説するも、我が此の法門中に永断して作ざるを、名づけて懺悔と為す、と。

今までに「四つの限りなき願い」を修行者は發した。そ

こで、修行者のために無相懺悔を説き、三世の罪を滅し去ることになった。

(慧能) 大師は次のようにいわれた。修行者諸君、我々の心の動きには過去の思い、未来の思い、及び現在の思い

があり、その一瞬一瞬の心の動きが愚かさに汚されることのないよう、今までの悪い行ないを一度に自己の本性から除き去るのが、即ち懺悔である。過去の思い、未来の思い、及び現在の思いがあり、その一瞬一瞬の心の動きが愚かさに汚されることのないように、以前の思いあがりを除き、雜念の心を永遠に断つことを名づけて、自己の本性よりの懺という。過去の思い、未来の思い、及び現在の思いがあり、その一瞬一瞬の心の動きが世間の悪しき風潮に汚されることないよう、過去のねたみの心を自己の本性から除くなれば、それが即ち懺である。<sup>(以上三唱)</sup>諸君、何を称して懺悔というのか。懺は、一生涯罪を犯さないことである。悔は、過去のあやまちや悪い行ないを自覚して、いつもそれへの反省を忘れないことである。本来は仏である修行者の前でわざわざいう必要のないことがあるが、衲の教えの中では、罪を永遠に断ち切つて、断じて再び行なわな

いと決意することを懺悔と称するのである。

校記

〔二〕 「既」を原本は「即」に作る。

〔二〕 この「滅」の字は惠昕本により補う。

〔三〕 原本はただ一つの「念」という字である。これは惠昕本により校訂する。

〔四〕 原本は「前惡」を「何西」に作る。敦煌本により加える。

〔五〕 この「今」の字は原本に欠ける。敦煌本により加える。

〔六〕 原本は「前」を「何」に作り、「誑」の字が欠ける。惠昕本により校訂する。

〔七〕 原本及び敦煌本は皆「疾垢」に作る。鈴木校訂本を参考にして改める。

〔八〕 原本は「懺」の字が欠ける。惠昕本を参考にして加える。

今は正なり、僧とは淨なり、自心は覺に帰依し、邪迷を生ぜず、欲少なくして足ることを知り、財を離れ、色を離るるを、両足尊と名づく。自心は正に帰依して、念々に邪無き故、即ち愛著なきをもつて、離欲尊と名づく。自心は淨に帰依し、一切の塵勞、妄念は自性に在りと雖も、自性に染著せざるを衆中尊と名づく。凡夫は解らず、日より日至り、三帰依戒を受く。若し仏に帰依すと言わば、仏は何処にか在るや。若し仏を見ずんば、即ち帰する所無し。既に帰する所無くば、言は却つてこれ妄なり。善知識よ、各自ら觀察し、錯りて意を用うること莫かれ。経中にただ「自ら仏に帰依す」と言い、他仏に帰依すと言わず、自性に帰せすんば、所依の處無し、と。

今既に懺悔し已る。善知識のために無相の三帰依戒を授けんとす。大師の言く、善知識よ、覚りたる二足尊に帰依し、正なる離欲尊に帰依し、淨なる衆中尊に帰依す。今より已後、仏を称して師と為し、更に邪迷、外道に帰依せず、自ら三宝に慈悲の証明を願うべし。善知識よ、慧能は善知識に勧めて、自性の三宝に帰依せしむ。仏とは覺なり、法師となし、決して人を迷わせる教えや仏法以外の教えに帰

依せず、自ら仏・法・僧の三宝に、救い導いて下さるあかしを下さるよう願わなくてはならない。諸君、衲は諸君に自己の本性に備わる三宝に帰依するよう勧める。仏は真理の体得者であり、法は真理であり、比丘とは清淨の人である。心より永遠の真理に帰依して、迷いの心が起こらず、欲望を制して満足を知り、財宝や色欲を捨てることができることを佛といふ。心より正しき教えに帰依し、一瞬一瞬に人を佛という。心より正しき教えに帰依し、一瞬一瞬によこしまな考えがなくて、心に執われがない存在を、執著・欲望を離れた仏という。心から清淨なる存在に帰依した結果、あらゆる汚れに満ちた苦悩や、迷える思いが自性にあつたとしても、自性そのものは決してよごされない存在を、悟った後も修行を続ける仏というのである。凡人はそれがわからぬので、いつもいつも、三種の帰依戒を受けるのみである。もし仏に帰依するというなら、仏はどこにおられるのか、もし仏にお目にかかるべくなら、何を依りどころとするのか。依りどころがなければ、その言葉は逆に苦しみになってしまいます。諸君、各自で見とどけて、まちがつた考え方をしてはならない。經典にはただ「自ら仏に帰依する」とあり、「他なる仏に帰依する」とは記され

ていない。自己の本性の仏に帰依しないで、何を依りどころとできるのか、示された。

校記

- (二) 「授」を原本は「受」の字に作る。  
(二) 原本は「身三宝」に作る。惠昕本を参考にして「自性三宝」に校訂する。  
(三) 原本は「不」の字がない。鈴木校訂本を参考にして補う。  
(四) 原本はこの「依」の字を欠く。惠昕本により補う。

今既に自らの三宝に帰依す。すべて各々至心なるべし。

善知識がため摩訶般若波羅蜜の法を説く。善知識は念うといえども解らざるにより、慧能の説くを、各々聴くべし。

摩訶般若波羅蜜というは、西国の梵語にして、唐には大智慧到彼岸<sup>(一)</sup>と言う。此の法は須らく行はずべし、口に念うるにあらず。口に念えて行ぜずんば、幻の如く化<sup>(二)</sup>の如し。修行者の法身は仏と等しきなり。何をか摩訶と名づくるや。若し心を空じて禪となさば、即ち無記の空に落つ。世界の虚空<sup>(五)</sup>は、能く日月星辰を含み、大地山河、一切の草木、悪

人善人、悪法善法、天堂地獄、尽く空の中に在り。世人の性も空、亦復是の如し、性は万法を含みて是れ大なり。万法は尽く是れ自性なり。一切の人、及び人に非ざるもの、惡と善、惡法と善法、尽く皆な捨てず、染著すべからざれば、<sup>(六)</sup>猶虚空の如し。これ名づけて大と為す。これは是れ摩訶<sup>(七)</sup>なり。迷人は口に念え、智者は心に行す。又た迷人有りて、心を空と思わず、名を大と為す。此れ亦た是ならず。心量は大なるも、行ぜんば是れ小なり。<sup>(八)</sup>若し口に空を説いて、この行を修せざるは、我が弟子に非ず。

何をか般若と名づくるや。般若是れ智慧なり。一切の時中に、念々に愚ならず、常に智慧を行ずるを、即ち名づけて般若の行となす。一念の愚なれば、即ち般若是れ絶し、一念の智なれば、即ち般若是生ず。世人の心中は常に愚なり、自ら我れは般若を修すと言う。般若に形相無く、智慧の性即ち是れなり。何をか波羅蜜<sup>(五)</sup>と名づくるや。此れは是れ西国の梵語にして、唐には到彼岸<sup>(六)</sup>と言い、義を解けば生滅を離る。境に著すれば生滅起こり、水に波浪有るが如し。即ち是れを此岸<sup>(七)</sup>と為す。境を離るれば生滅無く、水の長流を承るが如し。故に即ち到彼岸と名づけ、故に波羅蜜と名づく。迷人は口に念えて、智者は心に行す。まさに念える時妄有り、妄有れば即ち真有に非ず。念々に若し行ぜば、是れ真有と名づく。此の法を悟る者は、般若の法を悟り、般若の行を修す。修せんば即ち凡なり。一念も修行せば、法身は仏に等し。善知識よ、即ち煩惱は是れ菩提なり。前念迷わば即ち凡なり、後念悟らば即ち仏なり。善知識よ、摩訶般若波羅蜜は、最尊・最上・第一なり、住すること無く去ること無く來ることなし。三世の諸仏は中より出でて、將に大智慧により彼岸に到る。五陰の煩惱・塵勞を打破せば、最尊・最上・第一なり。最上乗法を讃え、修行せば定んで仏と成る。去ること無く住すこと無く來往すること無し。是れ定慧等なり。一切の法に染まらずして、三世の諸仏は中より出で、三毒を変じて戒定慧と為すなり。

善知識よ、我が此の法門は一の般若より八万四千の智慧を生ず。何を以ての故なるや。世人に八万四千の塵勞有るが為なり。若し塵勞無くば、般若是常に在りて、自性を離れず。此の法を悟る者は、即ち是れ無念・無憶・無著なり。雜妄を起ことなれば、即ち自ら是れ真如の性なり。智慧を用いて觀照し、一切の法に於て、取らず捨てず、即

ち見性して仏道を成ずるなり。

今、これで諸君は自らの内なる三宝に帰依し終えた。すべての修行者は一心に聞かなければいけない。諸君のためには摩訶般若波羅蜜法の教えをここに説こう。諸君は口に唱えていながら、この教えを理解していないから、衲は諸君のためにこれより説く。それぞれよく聞きなさい。

摩訶般若波羅蜜の法とは、インドの言葉を音訳したものであり、唐の言葉では、偉大な智慧により悟りの向こう岸に着いたという意味である。これは必ず実践すべきもので、口に唱えるものではない。口に唱えても、修行しないのであれば、幻術やめくらましのように真実性のないものとなってしまう。修行者の本質は仏と同等である。では、どういうことを摩訶というのか。摩訶とは大きいという意味である。我々の心の広がりははかり知れず広大であつて、あたかも虚空のようである。もし心を何ものにも動かさないで静坐をするなら、たちまち無意識という誤った空に落ちこんでしまう。この世界の空間は太陽・月・多くの星を包み込むとともに、大地・山・河などすべての樹木、悪人・

善人・悪しきこと・善きこと、天界・地獄、それらすべてがこの空間の中に存在する。世間の人の本性が空であることもまったくこれと同じことである。人の本性があらゆる存在を包み込むことができるこことを大というのである。あらゆる存在がすべて我々の本性に含まれるのである。すべての人々、及び人以外の存在や、善とか悪、また、悪しきこと、善きことなどを、取捨せず、また執われなければ、心は虚空のようであり、その時、これを大というのである。また、それを摩訶というのである。迷う人は口に唱えるが、智慧ある人は心で実践する。さらに、迷う人は、心を動かさないことを自分で大といつてている。これもまた誤った見解である。心の動きは広大で極まりがない。それに対して、行じないのは自ら小さな世界としてしまつてしているのである。もし口先だけでこの教えを唱えながら、実践しない者があるならば、それは衲の弟子とはいえない。

どういうことを般若といいえば、般若とは仏の智慧のことである。あらゆる時に、一瞬一瞬の心の動きが愚かにならず、いつも智慧を働かせているのを般若の実践というのである。一瞬でも心の動きが愚となれば、般若の智

慧の働きは中断され、一瞬の心の動きが正しく働けば、般若が生じてくる。世間の人的心はいつも愚かであつて、自分から般若を学んでいるという。般若には見える姿はない。智慧の本体とはこのようなことをいうのである。般若には見える姿はない。智慧の本体とはこのようなことをいうのである。何を波羅蜜といふのかといえば、これはインドの言葉であり、唐の言葉では「向こう岸に到着する」という意味となる。その意味を悟れば、生死の迷いから抜け出すことができるが、対象に執われるならば、生死の迷いが出てくる。それはあたかも、水が波立つのと同じであり、それを迷いの岸に居るというのである。対象に執われなければ、生死の悩みはなく、あたかも水がいつも穏やかに流れて、絶え間がない。やえにこれを「悟りの向こう岸に到着した」というのである。そこで「波羅蜜（到彼岸）」と名づけられたのである。迷う人は口で唱えるだけであり、智慧ある人は心で実践する。唱えているとき、すでに心に妄想が生じ、妄想があればすでに真の姿があるとはいえない。一瞬の心の動きにもし般若の智慧を実践するならば、これこそ智慧がそこにあるといえるのである。このことが真に理解できるならば般若の智慧を得たということである。

でき、般若の行を実践しているといえるのである。これを実践しないならば、凡人である。一瞬でも実践するならば、その人の本体は仏と同じである。諸君、仏の立場で觀るならば、煩惱が悟りなのである。過去の心の動きが本心を見失つていれば、凡夫である。未來の心の動きが本心に気づけばそこで仏となる。諸君、大いなる般若の智慧の完成は、もつとも尊く、この上なく大切であり、最高の教えなのである。それは、どこかに留まることもなく、どこかに行くこともなく、どこから来ることもないのですが、過去・現在・未來のあらゆる仏はこの中から来られて、大いなる智慧により向こうの岸に行かれたのである。般若の智慧により五陰から生じてくる心の迷いや苦惱を打ち破るなら、もつとも尊く、この上なく大切であり、最高の教えといえる。最高の教えを受けたことを喜び、実践するならば、きっと修行を完成させて仏となることができよう。どこかに行くこともなく、どこかに留まることもなく、來ることも往くことがないのが定慧等である。すべての存在に執われないならば、過去・現在・未來のあらゆる仏がここから出て、三つの根源的迷いを戒定慧に変えるのである。

諸君、衲のこの教えでは一つの般若から八万四千の智慧が生まれるのである。なぜなら、人々には八万四千の俗世間での苦惱があるからである。もしその俗世間の苦惱がなければ、智慧はいつも我々の本体から離れないであろう。この教えがわかつた人は、ただちに穏やかで乱れない、執われのない心境に至るのである。心の乱れを起こすことがないなら、それが自己本来の不变の本体である。智慧の眼で観察し、すべての存在に対して取捨の心を起こさなければ、これこそ自己の本性を見極めて、この上もない仏の悟りを完成したことになるのである。

校記

- 〔一〕原本は「彼岸到」に作り、敦煌本も同じ。惠昕本を参考にして校訂する。
- 〔二〕原本は「如如化」に作る。惠昕本により「幻」の字を加える。
- 〔三〕「猶」を原本は「由」に作る。
- 〔四〕原本は「莫定心禪」に作る。敦煌本は「莫定心座」に作る。鈴木校訂本は「若空心坐」となす。惠昕本は「若空心靜坐」を作る。
- 〔五〕「世界虛空」の四文字は、惠昕本により補つて加える。

善知識よ、若し甚深法界に入り、般若三昧に入らんと欲

〔六〕「猶」を原本は「由」に作る。

〔七〕原本は「摩訶」の下に「行」の字がある。

〔八〕原本は「行」の字が欠ける。惠昕本により加える。

〔九〕「若」を原本は「莫」の字に作る。

〔一〇〕原本に「切」の字はない。惠昕本により加える。

〔一一〕原本は「愚」を「思」に作る。敦煌本により改める。

〔一二〕「愚」を原本は「思」に作る。

〔一三〕原本は「世人」と「自言」を欠く。惠昕本を参考にして

補う。

〔一四〕原本に「般若」の二字はない。惠昕本により加える。

〔一五〕原本は「何名」の下に「般若」の二字を入れる。

〔一六〕原本は「彼岸到」に作る。

〔一七〕原本は「爲」を「於」に作る。鈴木校訂本を参考にして

改める。

〔一八〕「承」を原本は「水」に作る。

〔一九〕原本では「若」の下に「不」の文字がある。敦煌本によ

り削除する。

〔二〇〕原本は「中」を「口」の文字に作る。

〔二一〕原本は「出」の字がない。

〔二二〕原本に「一般若生」の四文字はない。惠昕本により補う。

〔二三〕原本は「憶」を「億」の字に作る。

せば、真に須らく般若波羅蜜の行を修すべし。但だ『金剛般若波羅蜜經』一巻を持すれば、即ち見性して般若の三昧に入ることを得ん。當に知るべし、此の人の功德は無量なることを。經中に分明に讚嘆せるも、具さに説くこと能わず、此れは是れ最上乗法にして、大智上根の人の為に説くなり。小根智の人若し法を聞くも、心に信を生ぜず。何を以ての故なるや。譬えば大龍の如く、若し大雨を下さば、<sup>(二)</sup>雨は閻浮堤に於て、城邑聚落、悉く皆な漂流<sup>(三)</sup>して、草葉を漂わすが如し。若し大雨を下さば、雨は大海に於て、不増不減なり。若し大乘の者、『金剛經』を説くを聞かば、心開けて悟解す。故に本性には自ら般若の智有りと知る。自ら智慧を用いて觀照し、文字を仮らざるなり。譬えば其の雨水のごとく天に有るにあらず、もとは是れ龍王が江海の中に於て身を将つて此の水を引き、一切の衆生、一切の草木、一切の有情無情をして、悉く皆な潤いを蒙らしむ。諸水衆く流れ、却つて大海に入り、海は衆き水を納めて、一体と為すが如し。衆生の本性の般若の智も、また是の如し。小根の人、此の頓教をきくならく、猶お大地草木の根性の自ら小なる者、若し大雨の一沃を被らば、悉く皆な自ら倒れ、

増長すること能わず。<sup>(五)</sup>小根の人もまた是の如し。般若の智有るは大智の人と、亦差別無し。何に因つてか法を聞いて即ち悟らざるや。邪見の障り重く、煩惱の根深きに縁る。猶お大雲の日を覆蓋し、風吹くことを得ずんば、日の現れざるが如し。般若の智に亦た大小無きも、一切衆生に自らざるは、即ち是れ小根の人なり。其の頓教を聞きて、外に修を<sup>(三)</sup>仮らず、但だ自心に於て、自らの本性常に正見を起こさば、衆生における一切の邪見・煩惱・塵勞は、當時にことごとく悟となる。猶お大海の衆流を納め、小水大水は合して一体と為るが如し。即ち是れ見性なり。内外に住せざれば、來去自由なり。能く執心を除かば、通達無礙なり。心に此の行を修さば、即ち『般若波羅蜜經』と本より差別無し。

る。ここで明確に知つておくべきことは、この人の功徳は量れないということである。この經典の中では詳細にその功徳が讃嘆されているが、この場ではそれを詳しく説明することはできない。この教えはもつとも勝れた教えであつて、偉大な智慧をそなえた優れた人に対して説かれたものである。素質の乏しい、智慧の足りない人がこの教えを聞いても、心中に信をおこすことができないであろう。なぜかというと、たとえば、偉大な龍王が人間の住んでいる地上に大雨を降らせたなら、都市も村里も、ことごとく押し流されて、あたかも草の葉が水上に浮んでいるような状態になるが、大雨が降る時、それがもし大海に降れば、海水は増えも減りもしないのと同じである。また、大乗の教えを信じる人が『金剛經』の教えを聞けば、心の眼が開けて悟りを得るのである。これからみると、人の本性はもともと般若の智慧をもつた人とまったく差別がないのに、どういうわけで教えを聞いて、自分で悟りを開くことができないのであろうか。それは、誤った考え方から生じる障害が重なり、執着の苦惱の根がふかいためである。あたかも、厚い雲が太陽をおおいかくしてしまい、風が吹かなければ、太陽が現れないのと同じである。般若の智慧には大小の差別はないのであるが、すべての人々は自分の心にある本来の姿を見失つてゐるため、修行して自分の外に仏を探そうとし、自己の本性そのものが仏であることに気づかないでいるのである。こういう人を引き出して、すべての人々、あらゆる草木、あらゆる生命

あるものにも、生命なきものにも、ことごとくその潤いをもたらしているのである。多くの川が大海に流れ入つてしまえば、海で多くの水が集まつて一つになるように、人々の本性に具わっている般若の智慧も、やはりこれと同じである。素質の劣つた人が、この根元的な教えをきくのは、ちようど大地にある根の力の弱い草木が、大雨に降られたならば、ことごとく倒れて生長することができないようなものである。素質の劣つた人も、やはりこれと同じである。般若の智慧が内にあることは、偉大な智慧をもつた人とまったく差別がないのに、どういうわけで教えを聞いて、自分で悟りを開くことができないのであろうか。それは、誤った考え方から生じる障害が重なり、執着の苦惱の根がふかいためである。あたかも、厚い雲が太陽をおおいかくしてしまい、風が吹かなければ、太陽が現れないのと同じである。般若の智慧には大小の差別はないのであるが、すべての人々は自分の心にある本来の姿を見失つてゐるため、修行して自分の外に仏を探そうとし、自己の本性そのものが仏であることに気づかないでいるのである。こういう人を素質の劣つた人というのである。衲の教えを聞いて、外に

修行の手掛かりを求めず、ただ自分の心の中に、いつも正しいものの見方をおこすなら、人々が内包するすべての誤った考え方や、俗世間の欲望・苦悩は、その場ですべて悟りとなるのである。これはあたかも海が多くの川を受け入れて、少しの水も、多くの水もすべてをあつめて、一つになすようなものである。これが即ち悟りということである。

自分の心にも外の対象にも執われなければ、來ることも行

くことも思いのままである。また、執われ的心を除くことができるならば、どのような行いにもなんのさまたげも生じない。徹底してこの行を実践することができるなら、諸君の本性は『般若波羅蜜經』と本質的相違はないのである。

校記

(一) 原本は「小」を「少」に作る。

(二) 「於」の字を原本は「提」の字に作る。

(三) 原本に「城邑聚落、悉皆漂流」という八文字はない。敦煌本も同じである。惠昕本により補う。

(四) 原本は「增」を「曾」に作る。

(五) 原本は「般若」を誤って「本性」に作る。敦煌本により改める。

(六) 「小」を原本は「少」に作る。

(七) 原本は「小」を「少」に作る。

(八) 原本は「悉」を「迷」に作る。「倒」を「到」に作る。それに敦煌本・惠昕本により校訂する。

(九) 「小」を原本は「少」に作る。

(一〇) 「假」を原本は「信」に作る。敦煌本も同じである。鈴木校訂本により改める。

一切の經書及び文字、大小二乘十二部經も皆な人に因りて置く。智慧の性に因る故に、故に然れば能く建立す。若し世人無くば、一切の方法は本より有らず。故に、方法は本と人に従りて興り、一切の經書は人の説くに因りて有ることを知る。人の中に在るに縁り、愚あり智あり。愚は小人と為り、智は大人と為る。迷人の智者に問わば、智者は愚人のために法を説き、彼の愚者に悟解心開せしむ。迷人の若し悟解心開せば、大智人と別なること無し。故に知る、悟らざれば即ち仏は是れ衆生なり、一念若し悟らば、即ち衆生は是れ仏なりと。故に知る、一切の方法は尽く自身の心中に在ることを。何ぞ自心によりて、頓に真如の本性を見ざる。『菩薩戒經』に云く、「<sup>(五)</sup>戒の本源は自性清淨な

り」と。心を識りて見性せば、自ら仏道を成す。『淨名經』に云く、「即時に豁然として還た本心を得たり」と。

すべての經典や語録、大小乘のあらゆる教えを記した經典は、すべて人によつて設けられたものである。智慧といふ本性にもとづいてはじめて成立したのである。もし世の中の人が存在しなければ、すべての教えはもともと存在しないといつてもよいのである。そうであるなら、一切の事象はもともと人が居るから出現したのであり、すべての經典は人が説いたため存在していることがわかる。人の中であるからには、愚があり智もある。愚はつまらない人となり、智は立派な人となすのである。迷う人が智者に真理をたずね、智者は愚者のために教えを説く。それにより愚者は真理を悟つて心を開くことができる。迷う人がもし悟つて心を開くならば、そのまま智者と差別はないのである。であるから、めざめないならば、本源は仏といえどもただの人にはすぎない。一瞬にめざめたときは、ただの人が仏となるのである。それ故、あらゆる事象はすべて自身の心より生じるものであることがわかる。どうして自分

の心を働かせて、即座に真実なる実体にめざめようとしたのか。『菩薩戒經』にも記されている。「戒はもともとその本性が清浄なのである」と。もし自己の本性を認識し、自己本来の眞実を明確に把握するならば、誰もが仏道を完成させることができるのである。『淨名經』にも記されている、「たちまちはつきりと、自己の本来の心にたちかえることができる」と。

#### 校記

〔二〕 原本は「我若無智人」に作る。敦煌本も同じである。これは惠昕本により改める。

〔三〕 原本は「小人」を「小故」に作る。

〔四〕 原本のこの句を「問迷人於智者」に作る。

〔五〕 原本は「彼」を「使」に作る。鈴木校訂本に従う。

〔六〕 原本は「解」の字を欠く。惠昕本により補い加える。

〔七〕 原本は「戒」を「我」に作る。『梵綱經』に云く、「……一切衆生戒、本源自性清浄。」詳しく述べて記す。

〔八〕を見よ。

〔七〕 原本はこの四文字が無い。惠昕本により補う。

善知識よ、我是忍和尚の處に於てひとたび聞き、言下に

大悟し、頓に真如の本性を見たり。是の故に、まさに此の教法<sup>(二)</sup>を後代に流行し、学道の者をして、頓に菩提を悟らしめ、各々自らの心を観て、自らの本性を頓悟せしめんとする。若し自ら悟ることあたわざれば、すべからく大善知識の示道を覧めて見性すべし。

何をか大善知識と名づく。最上乗法を解つて、正路を直示す。是れ大善知識なり。是れ大因縁なり。いわゆる化尊して、見性<sup>(五)</sup>を得せしむ。一切の善法は、みな善知識に因りて能く発起するが故なり。三世の諸仏、十二部經は、人の性中に在りてもとより自ら具有す。自ら悟ること能わざれば、須らく善知識の示道を得て見性すべし。若し自ら悟る者は、外に善知識を求むることを仮らず。若し外に取りて善知識を求むれば、解脱を得んと望むも、是の処有ること無し。自心の内に善知識を識らば即ち解脱を得たり。若し自心が邪迷にして、妄念顛倒せば、外なる善知識の即ち教授有りといえども、救いを得べからず。汝が若し自ら悟ることを得ざれば、まさに般若を起こして觀照し、刹那の間、妄念俱に滅す。即ち是れ自ら真正の善知識なり、一悟して即ち、地に至らん。自性の心地に、智慧を以て觀照し、

内外明徹なれば、自ら本心を識る。若し本心を識らば、即ち解脱なり。既に解脱を得ば、即ちこれ般若三昧なり。般若三昧を悟らば、即ち是れ無念なり。

修行者諸君、衲は弘忍和尚の会下で、ひとたびこの教えを聞いて言下に悟り、即座に自己の不变なる本性に気づいた。であるから、この教えを後世の人々に伝え弘め、修行者に即座に仏の悟りの智を得させて、各自に自己の本心を觀察させ、自己の本性にめざめさせようとするものである。もし自分でめざめることができないのなら、必ず優れた正しい指導者に道を示してもらい、本性にめざめるべきである。

どのような人を優れた指導者といえども、もつとも勝れた教えに到達していく、正しい道をただちに指示することのできる人は優れた指導者である。優れた指導者に出会うことは悟りへの優れた原因となる。それは、指導者が人々を教え導き、自己の本性に気づかせるからである。あらゆる正しい教えは、優れた指導者によつてその力を發揮するからである。過去・未来・現在にわたるあらゆる仏

と、仏が説かれたすべての經典は、人の本性の中にもともと含まれているものである。しかし、自分でめざめること

ができなければ、必ず指導者に教えを求める、本性にめざめるべきである。もし自分でめざめることのできる人は外に

指導者を求める必要はない。もし外に向かつて指導者を求め、それにより、自分の自由を得たいと望むならば、その

ような道理はありえない。自分の心の中に指導者を見出すならば、即座に自由を得ることができよう。もし自分の心が迷いの状態にあり、欲望に苦しんでいるならば、外の指導者が教授したとしても、その者を救つてやることはできない。もし自らめざめることができないのなら、般若の智慧をもつてよく観るべきである。それができれば一瞬のうちに迷いの心は消滅してしまうであろう。これは自己の本性がそのまま優れた指導者であるということであり、これを悟ればたちまち仏の境地に到達できるのである。自分

の本性を智慧で觀察し、すべてを明らかに知るならば、心の中も外も明確に捉えることができ、自己の真実を悟ることができる。本心を悟るならば、それは眞の自由を得たことである。自由を得たならば、それこそ智慧の世界に入つ

たことであり、これを悟れば決して迷うことはないのである。

#### 校記

(二) 原本は「是故」を「是頓」に作る。敦煌本により改める。また「將此教法」を「以教法」に作る。惠昕本を参考にして校訂する。

(三) 原本は「不」の文字を欠く。惠昕本を参考にして「若自

不悟……」と補い加える。

(四) 「謂」を原本は「爲」に作る。惠昕本を参考にして改める。

(五) 原本は「見仏」に作る。以下の文脈から見れば「見性」に作るはずである。惠昕本は「所謂化尊、令得見性」と作す。  
(六) 「救不可得」は原本にない。敦煌本も同じである。惠昕本により補う。

何をか無念と名づく。無念の法とは、一切法を見て、一切法に著せず、一切處に遍くして、一切處に著せず、常に自性を淨めて、六賊<sup>(二)</sup>を六門より走出せしむれば、六塵の中に於て離れず染まず、來去自由にして、即ち是れ般若三昧

なり。自在に解脱するを、無念の行と名づく。若し<sup>(三)</sup>百物を思わずして、まさに念を絶えしむれば、即ち是れ法縛にして、即ち辯見と名づく。無念の法を悟る者は、万法に尽く通ず。無念の法を悟る者は、諸仏の境界を見る。無念の頓法を悟る者は、仏の位地に至る。

どうな状態を心が執著を起こさない状態というのであろう。いつも心に執著を生じさせない教えとは、あらゆる事象を見て、それらに執われることなく、あらゆる所にゆきわたつていながら、あらゆる所に心が執われず、いつも自分の本性を清浄にして、六つの知覚・感覚作用を解放し、それが捉える六つの対象の中であつても、それから離れることなく、染まることもなく、來るもの行くのも思いのままとなる。これが智慧の世界に入ったということがあり、思うままに自由であるから、心が執著を生じない修行と呼ぶのである。あらゆる対象に心を動かさず、心の働きを停止させてしまうならば、それは教えにより縛られるが如く、終身受持して退かざる者<sup>(四)</sup>の、聖位に入らんと欲<sup>(五)</sup>さば、然るのち須らく伝授すべし。從上已来、默然として法を付さんと、大誓願を發し、菩提を退かざれば、即ち須らく分付すべし、若し見解同じからずして、志願有ること

ごとく理解することができ、また、正しい心の働きを悟つた人は、諸仏の境地を知ることができる。正しい心の働きを即座に悟る人は、仏の境地に到達できるのである。

#### 校記

〔二〕「不著一切法」の五文字は原本に無い。敦煌本により補う。

〔二〕原本の「六賊」は、敦煌本も同じである。鈴木校訂本は「六識」に改める。実際には改めない方が正しいと思われる。「六識」を「六賊」と称するのは、北宋の神秀の「觀心論」にも見える。

〔三〕「若」を原本は「莫」に作る。

善知識よ、後代に吾が<sup>(二)</sup>法を得る者は、常に吾が法身の汝が左右を離れざるを見ん。善知識よ、まさに此の頓教の法門により、同見同行して、發願受持し、仏の教えを事とすが如く、終身受持して退かざる者<sup>(四)</sup>の、聖位に入らんと欲<sup>(五)</sup>さば、然るのち須らく伝授すべし。從上已来、默然として法を付さんと、大誓願を發し、菩提を退かざれば、即ち須らく分付すべし、若し見解同じからずして、志願有ること

無くんば、在々処々、妄りに宣伝すること勿れ。彼の前人を損じて、究竟益なし、もし愚人の不解にして、此の法門を諦すれば、百劫千生に、仏の種性を断ず。

きないであろう。

修行者諸君、後の世に衲の教えを了得した者は、いつも衲の法身が君の側を離れないことに気づくであろう。諸君、この即座に悟りに至る教えを、衲と同じように理解し、衲と同じく修行することを誓い、心に決めて忘れず、仏の教えをすべてとなし、そして一生修行を怠らない決意をした者が、仏の境地に到達しようと希望するならば、そこで衲は法を伝授するであろう。仏道を学び始めてから現在に至るまで、心から心へひたすら法を伝えるとする尊い誓いをたて、修行を決して怠らないならば、かならず教えを伝授すべきである。もし違う見方をもつて、修行の意思がない者がいたなら、どこであっても、安易に伝授してはならない。そのようなことをすれば、先人の伝燈をそこない、結果この教えが何の役にも立たないことになってしまう。愚かな人がこの教えを理解できないで、この頓教の教えを諦ることがあれば、永遠の時を重ねても、仏となることはで

校記

- (一) 原本は「法」の字を欠く。惠昕本により加える。  
(二) 原本に「於」の字はない。惠昕本により加える。  
(三) 「事」を原本は「是」に作る。敦煌本も同じである。鈴木校訂本は「事」に改める。惠昕本は「如事仏……」を作る。  
(四) 惠昕本はこの文を「終身而不退者」を作る。  
(五) 「於」を原本は「衣」に作る。文意から見れば、「於」となすのが適切である。

大師の言く。善知識よ、吾れの説く『無相頌』を聴け。汝、迷者の罪を滅せしめん。亦た『滅罪頌』と名づく。頌に曰く、

愚人は福を修めて道を修めず、

謂つて言く、福を修むるは便ち是れ道なり、と。

布施し供養して福を無辺に養うも、  
心中に三悪(三)を元來造るなり。

若しまさに福を修めて罪を滅せんと欲するも、  
後世に福を得んとするも、罪の元より(五)在り。

若し向心を解き、罪縁を除かんとせば、各の自性において真に懺悔すべし。

若し大乗を悟らば真の懺悔なり、

邪を除き正を行ずるなら即ち罪無し。

学道の人能く自ら観よ。

即ち悟人と同じく一類なり。<sup>(七)</sup>

大師、今此の頓教を伝う。

願わくは学の人と同じく一体とならんことを。

若し當来に本身を覗めんと欲せば、

三毒の惡縁を心裏に洗うべし。

修道に努力めて悠々なること莫れ、

忽然として虚しく度れば一世休む。

若し大乘の頓教の法に遇わば、

虔誠に合掌して至心に求めよ。

大師は次のようにいわれた。「修行者諸君、衲に『すべての執著を離れた心について詠んだ詩』があり、それをこれより説くので聽きなさい。この偈頌を唱えるならば、諸君の罪は消滅するであろう。それ故、またの名を『滅罪の頌』

ともいうのである」と。その偈頌は次のような内容である。自己を見失つた愚かな人は、自分勝手な解釈をして自己の利益を求めるのみで、真理にかなつた行動ができないでいる。

その者達は言つてゐる。利益を求めることが仏の教えを実践することだ、と。

布施を行ない、三宝に供養すれば、そこから得られる利益は多大なものがある。しかし、自分中心の欲望からなされたならば、初めから心には三悪趣（地獄・餓鬼・畜生）の惡行が宿つてゐることになる。

もし、その心で仏に帰依して利益を願い、自己の本性を覆う欲望を除きたいと思つても、また、未来によい結果を得られそうになつても、その心が障害となつて利益は得られないであろう。

もし、これまでの心を改めて、苦惱の原因を除こうとするのならば、

各自の本性の中で真の懺悔をすることだ。

もし般若波羅蜜の智を得て悟りに至るならそれが眞の懺悔といえ、

研究ノート 『敦煌新本 六祖壇經』 試訳(二) (佐藤)

邪念を捨てて正しい修行を行なえば、そこに罪は消える。

仏道を学ぶ人はよく自らの本性を見届けなくてはならない。

そこに至つて悟った人の仲間となることができる。

大師方は今説くこの頓教を納（慧能）に伝えられた。

それは、祖師が仏道を学ぶ人と一体となることを願われたためである。

もし来世に自身の本源を得たいと願うなら、

人を迷わせ苦しめるすべての悪い原因を心の中から除き去るよう、自分の力で自己を清めることだ。

力を尽くして仏道を修行して、のんびりするな。

このことが理解できなければ、無駄な努力を続けたままで一生を終えることになろう。

もし大乗の教えの中でも特に頓教を聞くことがあれば、心より合掌し、真心こめてその教えを求めよ。

〔二〕 原本は「遇」の字を作る。  
校記

〔二〕 「便」を原本は「如」を作る。敦煌本も同じである。恵昕本の「只言修福便是道」により改める。

〔三〕 原本は「惡」を「業」を作る。恵昕本により改める。

〔四〕 原本は「造」を「在」を作る。恵昕本により改める。

〔五〕 原本は「在」を「造」を作る。恵昕本により改める。

〔六〕 原本は「大」を「六」を作る。

〔七〕 原本は「類」を「例」を作る。恵昕本により校訂する。

〔八〕 原本は「至」を「志」を作る。恵昕本により改める。

大師、説法を了るや、韋使君・官僚・僧衆の道俗より、  
讃言の尽くること無し、昔には未聞の所なり。

使君は礼拝し、白いて言く、和尚の説法は實に不思議なり。弟子嘗て少しの疑い有り、和尚に問わんと欲す。望むらくは和尚が大慈大悲をもて、弟子のため説かれんことを、と。

大師の言く、疑い有らば即ち問え、何ぞ再三するを須いん、と。

使君の問う、〔和尚が説くところの〕法は、是れ西國の第一祖<sup>(四)</sup>の達摩大師の宗旨にあらずや、と。

大師の言く、是なり、と。

〔使君の問う〕、弟子いうならく、達摩大師が梁武帝を化す〔五〕ると。帝の達摩に問う、『朕は一生已に寺を造り、布施し、供養し来る、功德の有りや否や』と。達摩の答えて言く、『並に功德無し』と。武帝の惆悵たり。遂に達摩を遣つて出境せしむ、と。未だ此の言を審らかにせず、和尚の説くを請う、と。

六祖の言く、實に功德無し、使君の疑うこと勿れ。達摩大師の言は、武帝の邪道に著し、正法を知らざるによるなり、と。

使君の問う、何を以て功德無しとすや、と。

和尚の言く、寺を造り、布施し、供養すといえどもただ

これ福を修むるのみなり、福をもつて功德と為すべからず。功德は法身に在り、福田〔七〕にあるにあらず。自らの法性に功

徳有り。見性は是れ功、平直は是れ徳なり。〔内に〕仏性を「見ば」〔八〕、外には恭敬を行ず。若し一切の人の輕んじて、吾我を断ぜざれば、即ち自ら功德無し。自性は虚妄〔九〕なり、法身は功德なし。念々に行じて真心の平等なるは、徳を即ち軽んぜず。常に敬を行じ、自ら身を修むれば即ち功なり。

自ら心を修むれば即ち徳なり。功德は自心にて作るべし。

福は功德と別なり。武帝は正理を識らず、祖大師に過有るに非ず、と。

大師の説法が終了すると、韋使君・役人・僧侶をはじめとする在俗の弟子たちはほめたたえた。そのような教えは過去に聞いたことがなかつた。

使君は礼拝して申し上げた。「和尚の説法には、まことに言葉も及ばぬほど、深い感銘を受けました。私に過去より小さな疑問がござりますので、お伺いしたいと存じます。なにとぞ大慈大悲もつて、ご説明を賜わりたく存じます」と。

大師は言られた。「疑問があるのなら、すぐに質問されよ。幾度もくりかえして、いう必要はない」と。

使君は質問した。「和尚が説かれた教えはインドから渡来され、中国での第一祖となられた達摩大師の教えではないでしようか」と。

大師は言られた。「そのとおりだ」と。

使君は質問した。「私は人から聞いて存じております。達摩大師が梁の武帝を教化された時、帝が『朕は生涯にわ

たって、寺を建て、僧衆に布施をし、供養した。それでどれほどの功德があろうか』と尋ねますと、達摩大師は『功德などはまったくない』と答えられました。武帝はその答えに失望し、達摩大師を国外に追放したといいます。私はこの言葉の意味がわかりません。どうか和尚、私にご説明ください』と。

六祖は言われた。「達摩大師の言葉どおりまったく功德はない。達摩大師は、武帝が誤った考えに執著して、正しい教えを知らなかつたため、親切心からこの答えを与えたのだ」と。

使君は質問した。「どうして功德がないのですか」と。

和尚は言われた。「寺を建て、布施を行じ、供養を行なつたとして、それは自分の利益を望むための行為というべきであり、利益を得たことで真理を得たと思つてはならない。真理は自己の法身の中にあるのであって、供養などを行なうこととは関係しない。自己の法性の中に真理がある。」

#### 校記

(一) 「嘗」を原本は「當」に作る。敦煌本も同じである。鈴木氏は惠昕本を参考にして「今」に改めた。「嘗」に作るのが比較して勝ると思われる。

(二) 原本は「何」の字が欠ける。敦煌本により補う。

(三) 「問」を原本は「聞」に作る。

(四) 原本は「祖」を「師」の字に作る。敦煌本により改める。

(五) 原本は「化」の字を「代」に作る。「弟子見説達摩大師代、梁武帝問達摩……」としても通じるが、ただし下の武帝は達摩を国外に追い出したという内容と相応しない。鈴木氏

を軽視して、自我の意識を断ち切れないなら、そこに真理を得ることはないのである。自己の本体が迷つたままであるなら、本性は真理を得られないのである。一瞬一瞬の心の働きがまっすぐで公平であるなら、徳を軽視しない人といえる。常に謙虚に行動し、自分で身を清めるのが功であり、自分で心を清めるのが徳である。真理は自分の中から見つけ出してゆくのであって、利益を得ることと真理を得ることは別のことである。武帝が正しい教えを知らなかつたのであって、わが祖師達摩大師にまちがいがあつたのではない」と。

は惠昕本によつて「達摩大師代梁武帝」と校訂した。今はそれに従う。

[六] 原本は「帝」の字が欠ける。惠昕本を参考にして加える。

[七] 原本は「田」の字が欠ける。惠昕本により加える。

[八] 原本は「平直是仮性」に作る。敦煌本は「平直是徳仮性」に作る。惠昕本により、「平直」の前に「見性是功」を加える。また敦煌本により「是」の下に「徳」の字を補う。鈴木校訂本を参考にして「仮性」の前に「内見」の二文字を加える。

[九] 原本はこの句を「自性無功德」に作る。敦煌本により改める。

[一〇] 「直心」を原本は「真心」に作る。

使君の礼拝し、又た問う、弟子は僧俗の常に阿弥陀仏を念じて、西方への往生を願うを見る。請う、和尚よ、説きたまえ、彼に生ずることを得るや否や。望むらくは疑いを破したまえ、と。

大師の言く、使君よ、慧能の説くを聞け。世尊の舍衛城に在つて、西方の引化を説きたまう。経文は分明に此を去ること遠からざとなす。ただ下根の為に遠しと説き、近しと説くはただ上智にちなむ。人には兩種(四)有れども、法に(五)兩

般無し。迷悟に殊なること有り、見に遲疾有り。迷人は仏を念じて彼に生ぜんとし、悟者は自ら其の心を淨む。ゆえに仏の言く、「其の心の淨きに随つて則ち仏土淨し」と。使君よ、東方の人のもし心淨ければ即ち罪無(云)し。西方の人的心淨からざれば亦た愆有り。迷人は東方に生ぜんと願う。両者の所在の處、並に皆一種の心地なり、但だ不淨のなきなり。西方は此を去ること遠からざるも、心に不淨の心を起こさば、念佛するも往生に到り難し。(九)十惡を除かば即ち十万を行き、八邪の無ければ八千を過ぎん。但だ直心を行せば、到ること彈指の如し。使君よ、但だ十善を行せよ、何ぞ更に往生を願うを須いんや。十惡の心を断ぜずんば、何れの仏か即ち來たつて迎請せん。若し無生の頓法を悟らば、西方を見ることただ刹那に在り。頓教の大乗を悟らざれば、念佛しての往生も路は遠し、如何が達することを得んや、と。

使君は礼拝して再び質問した。「私は僧侶や在家の信者が、いつも阿弥陀仏の名号を唱えて、西方淨土に生まれようと願つてゐるのを見ています。どうか和尚よ、私に、い

つたいたい淨土に生まれることができるものかどうかを教えてください。どうぞ私のために疑問をお解き下さい」と。

大師は申された。「使君よ、衲の話しを聞きなさい。釈尊が舍衛城におられたとき、西方淨土についての説法をされた。經典には明確に『淨土はここから遠くない』と記してある。ただ素質の劣つた者のために遠いと言つてているのだ。近いと説くのは、それを理解できる者のためである。人には二つの種類があるが、仏法に二種類あるわけではない。迷うか悟るかの違いであり、めざめるのに遅い早いの別があるのである。迷っている人は、念佛してそこに生まれたいと願うが、悟つた人は、自ら自分の心を清める。だから仏はいわれた、『心が清らかになるのに伴つて、仏國

土も清らかになる』と。使君よ、東方の人であつても心が清らかであれば罪はない。西方の人でも心が清らかでないならば罪があるのである。迷う人は東方に生まれたいと願う。両者ともあるところは皆同じ心根である。ただ淨らかでないものはないのである。西方はここから遠くはないが、もし淨らかでない心を起こしたなら、念佛してそこに生まれようと願つても到達することはむつかしい。心の十悪を

除くことができるなら、十万里を進んだことになる。つぎに八邪を除くなら、八千里を越えたことになる。ひたすら真つすぐに心を働かせていれば、淨土にゆきつくのは指をはじくほどの僅かな時間である。使君よ、いつも十善を実践するならば、どうしてことさら往生を求める必要があるか。十惡の心を断滅できなければ、どのような仏も迎えに来られることはない。もし変わることのない頓悟の教えを了得したなら、西方淨土に到るにもほんの一瞬があればよいのである。頓悟の教えの真理にめざめないならば、念佛して淨土に生まれようと願つても、その道は遠くて、とても到達できるものではない」と。

校記

(一) 原本は「往」の字を欠く。敦煌本により加える。

(二) 原本は「遠」を「近」に作る。惠昕本を参考にして改める。

(三) 原本は「近」を「遠」の字に作る。惠昕本を参考にして改める。

(四) 原本は「有」を「自」の字を作る。敦煌本も同じである。誤りではないが、次の「法無両般」の「無」と対応しない。ゆえに惠昕本を参考にして改める。

〔五〕原本は「両」の字がない。惠昕本により加える。

〔六〕原本は「東方但淨心無罪」に作る。今、惠昕本の「東方人但心淨即無罪」を参考にして、「人」と「即」の二文字を加える。

〔七〕原本は「西方心不淨有愆」に作る。今、惠昕本の「雖西方人心不淨亦有愆」を参考にして、「人」と「亦」の二文字を加える。

〔八〕原本は「両」を誤写して「西」に作る。

〔九〕原本は「十」の字が無い。惠昕本により加える。

〔一〇〕原本は「真」の字を作る。

〔一一〕原本は「彈」を誤つて「禪」の字を作る。

〔一二〕「達」は原本に誤つて「但」の字を作る。

※「壇經」試訳の(一)については、『愛知学院大学禅研究所紀要』第二十三号に、また、当該部分(二)の続きとなる(三)については、『愛知学院短期大学紀要』第四号に掲載した。

本来は原文を記すべきであるが、既に楊曾文先生が上海古籍出版社より『敦煌新本 六祖壇經』として上梓されており、日本でも入手できるところから、この形態を採つたことも申し添えておく。